

VGP2024 SUMMERで金賞を獲得した 音質特化イヤホン 3兄弟の選び方

HIFIMANが誇る独自R-2R DACモジュール「HYMALAYA DAC(ヒマラヤ・ダック)」を搭載するなど、徹底的に音質に特化した設計で注目される「Svanar(スヴァナー)シリーズ」。

現在は原点である「Svanar Wireless」以外にも、弟モデルが2モデル追加されているが、外観が似ていることもあり、差分がわかりにくいのも事実だ。

そこで今回は3兄弟の選び方をVGP審査員の鴻池賢三氏がナビゲートする。

文／鴻池賢三 Kenzo Konoike

写真／阿部良寛



ノイズキャンセリング対応
完全ワイヤレスイヤホン

HIFIMAN
Svanar
Wireless

¥ 79,860(税込) ▶ 投票 No.140

ノイズキャンセリング対応
完全ワイヤレスイヤホン

HIFIMAN
Svanar
Wireless LE

¥ 47,190(税込) ▶ 投票 No.141

ノイズキャンセリング対応
完全ワイヤレスイヤホン

HIFIMAN
Svanar
Wireless Jr

¥ 21,560(税込) ▶ 投票 No.142

コンセプトは同じだが、音質には明確な差がある

「Svanarシリーズ」は、HIFIMANが提案する「音質にリソースを振り切った超個性派完全ワイヤレスイヤホン」。ご存知の通り、完全ワイヤレスはケーブルに縛られない快適さが受けメイントリームに上り詰めた経緯がある。しかし裏を返すとBluetooth SoCやサイズ、重量および低消費電力が優先され、音質面では利用できるコーデック、DACやアンプの性能が犠牲になりがちだった。価格も然りである。こうした、オーディオマニアのフラストレーションに切り込んだ提案が「Svanarシリーズ」といえるだろう。万人受けを狙わない潔さは、趣味人としても共感を覚えるが、VGPでも高く評価されいずれも部門金賞に輝いている。

Svanarシリーズ3製品の概要と違いを解説しよう。同シリーズのコンセプトを象徴するのが最初に発売された「Svanar Wireless」。汎用のDACチップではなく、同社が磨きを掛けってきたR-2R DACモジュール「HYMALAYA DAC」を完全ワイヤレスに搭載して大きな話題となった。LDACにも対応するフラッグシップモデルである。「Svanar Wireless LE」は、モデル名通りSvanar Wirelessのライトエディション。LDACとワイヤレス充電を省いて大幅な低価格化を果たした。「Svanar Wireless Jr」は、Svanar Wirelessの資産を活用しつつ手に届きやすい価格が魅力。HYMALAYA DACは非搭載ながら、LDACへの対応は見逃せない。

では3モデルの音質性能やサウンド傾向はどうだろうか？同じプレイヤーで比較試聴を行った。最上位のSvanar Wirelessは、HYMA

LAYA DACが放つ鮮烈で躍動感溢れるサウンドが持ち味。高鮮度でアナログ的なナチュラルさは、音質傾向云々以前に「いい音」と直感できるもの。ジャンルを選ばないが、主にハイレゾ音源を利用し、倍音を含むアコースティック楽器やボーカルのリアルな音色、奥行のあるナチュラルな空間の広がりを求めるユーザーにとっては、格別な選択肢になるだろう。LEはAAC接続が利用可能。AACの限界を感じてしまうが、逆に本機の再生能力が高い証明でもある。HYMALAYA DACならではと思えるナチュラルさは大きなアドバンテージだ。Jrも面白い選択。ノイズを低く抑えたまとまりのよい高音質。LDACによる情報量の多さが滑らかで上質な表現に繋がり、元気さも併せ持っていて楽しめるサウンド。下位モデルというよりは、「聴き慣れた高音質」という点で高く評価でき、コストパフォーマンスの高さは抜群に感じる。

3兄弟ともいえるSvanarシリーズ。選べる反面、迷いも生じそうだ。音質最優先ならSvanar Wirelessで決まりだろう。LDAC+HYMALAYA DACの鮮烈かつ躍動感に溢れるサウンドは唯一無二の価値を放つ。iPhoneユーザーでLDACにこだわらない場合はLEがお買い得。HYMALAYA DACの恩恵もしっかりと感じられ、プレミアムな音楽体験ができる。予算が限られつつもSvanarのエッセンスを感じたいならJrが好適。LDAC対応で実力も伴い、コストパフォーマンスの面でもお薦めできる。リスニングスタイルに応じて選べるSvanarシリーズ。オーディオファンが注目すべき個性派製品だ。

ココに注目 01

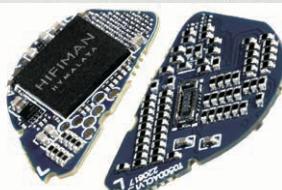
3兄弟のスペック差を確認。注目はDACの有無

型番	DAC モジュール	アンプ	振動板	コーデック	ANC	再生時間	無線充電	防水機能
Svanar Wireless	HYMALAYA DAC	トポロジーダイヤフラム		SBC、AAC、LDAC	○	7時間(ケース込み28時間)	○	IPX5
Svanar Wireless LE				SBC、AAC			×	
Svanar Wireless Jr	×	独立AB級		SBC、AAC、LDAC		8時間(ケース込み32時間)		

左の表は各モデルのスペックを一覧表にしたものだ。注目はHYMALAYA DACモジュールの有無。上位2モデルには搭載しているが、Jrは非搭載。ここはかなり大きなポイントで、音質のキャラクターも大きく異なる。Svanar Wirelessは解像度が高く、音場も清澄。高域が非常に美しく、弦楽器の再生などは絶品だ。一方、Jrは低域をパワフルに鳴らすタイプだ。また、振動板はいずれも独自の「トポロジーダイヤフラム」を採用。詳細は非公開だが、表面構造を適切に調整しているという。

ココに注目 02

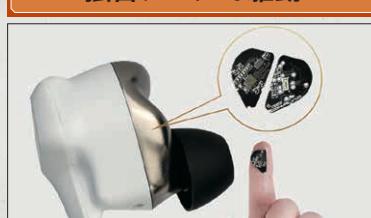
「HYMALAYA DAC」とは？



HYMALAYA DACは、R-2Rラダー形式という抵抗を用いたデジタル・アナログ変換方法を用いているのが特長。そもそもR-2R形式は抵抗の品質差があると期待した性能が出ないと物理的に回路が大きくなってしまう反面、艶のあるHIFIサウンドが魅力。HIFIMANはそのしたデメリットを克服してメリットだけを抽出したDACモジュールを独自開発したのだ。

ココに注目 03

独自アンプで駆動



多くの完全ワイヤレスイヤホンは、汎用のBluetooth SoCに内蔵するアンプ機能を使用し、DSPを用いて音質調整を行うが、Svanarシリーズはいずれも独自に音質調整を行っている。上位2モデルはHYMALAYA DACモジュール内にあるアンプを使うが、JrはAB級のバランスアンプモジュールを採用。Svanarシリーズを音質特化モデルという理由がここにある。

ココに注目 04

イヤホンサイズは同じ



イヤホン形状はSvanarシリーズで共通しているが、バックハウ징のデザインなどが少々異なる。その一方、サイズは一般的なイヤホンよりもかなり大きめだが、エルゴノミクスデザインを採用したり、形状の異なるイヤーチップを複数付属したりしているため、見た目ほど装着性が気になることは少ないだろう。またイヤホンはタッチ操作にも対応している。